

「男、突っ走る！」

第94回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (24)

『オフィスツリーイン』代表

国枝 佐代子 (59)

『スリジエネ』総合プロデューサー

国枝 茉奈 (27)

佐代子の娘

山中 敦夫 (44)

劇団主宰者

本田 所俊子 (63)

市民映画プロデューサー

本村 晴臣 (54)

音楽プロデューサー

住吉 真由美 (42)

舞台俳優

野倉 浩平 (22)

ダンス講師

藤田 昇海 (19)

『スリジエネ』メンバー

山森 直茜 (23)

『スリジエネ』メンバー

大坂 美央 (17)

『スリジエネ』メンバー

熊瀬 怜奈 (18)

『スリジエネ』メンバー

河辺 真理恵 (22)

『スリジエネ』メンバー

阿川 愛梨 (20)

『スリジエネ』メンバー

麦沢 寿梨花 (20)

『スリジエネ』メンバー

弘田 鈴川 (19)

『スリジエネ』メンバー

山岡 裕作 (20)

『スリジエネ』メンバー

北川 まひる (22)

『スリジエネ』メンバー

月島 藍那 (22)

『スリジエネ』メンバー

大森 泰明 (58)

『スリジエネ』メンバー

加原 美穂子 (35)

『スリジエネ』メンバー

加原 千世 (13)

『スリジエネ』メンバー

林原 亜里沙 (12)

『スリジエネ』メンバー

赤澤 隆太 (11)

『スリジエネ』メンバー

辻松 理央 (12)

『スリジエネ』メンバー

大坂 理央 (12)

オーディション参加者、美央の妹

1 レンタルスタジオ・一室

浩太、茜、昇平、直海が楽器の準備を
している――手伝っている寿梨。

と、ドアが開き、キーボードを抱えた
雅也が入ってくる。

雅也「おはよう」

一同「（それぞれに）おはよう」

寿梨「あ、これ？ 借りてくれたキーボード」

雅也「そうそう」

茜「結構大きいね」

浩太「こんなのよく借りれたね」

雅也「高校時代、仲の良かったクラスメイト
が趣味でキーボードやってるの思い出して
ね、事情話して本番まで貸してくれたの。

さすがにぶっつけ本番だけど、演奏するの
も大変だろうからって」

寿梨「ありがと、うちー（と準備をする）」

雅也「三年間同じクラスで仲も良かったんだ
けど、成人式以来会ってなかったからね。
ちやうど会える口実ができて良かったわ。

あ、一応ね取扱説明書のPDFも送ってくれたの。今、ジュリにLINEで送るわ」

と、スマホを取り出して、操作をする。

浩太「何から何まで、うちーに頼っちゃってごめんね」

雅也「全然。いくらでも頼って。俺は、『アステリズム』のマネージャーですから」

浩太「うちー」

雅也「(鞆から袋を出して)これ、お菓子とジュース買ってきた。後でみんなで食べよう」

昇平「さすがうちーだわ」

雅也「こんなことしかできないからね。それに、コウタもとみーも今朝神奈川から着いてきたばっかで、これから八月までしばらくこの状態が続くでしょ。完璧な状態でステージに立ってもらうためにバックアップするのも、マネージャーの仕事ですから」

茜「うちーにマネージャー頼んで正解だったわ」

直海「この間、『アステリズム』の告知チラシ、データでくれたでしょ。あれも良かったな」

昇平「(チラシの写真を見せて)これだろ。

『夏祭りに降り注ぐ5つの星群(ふりがな…アステリズム)』。本物の物書きみた
いな」

浩太「おいショウ、何言ってるんだよ。うちの
ーの本職は、物書きだぞ」

昇平「あ、そうだった」

雅也「大丈夫、最近よく後輩に言われるの。

『今、うちー先輩って結局何やってるんですか?』って。まあ、フリーペーパー作ったり、会報誌の依頼受けて作ったりしてるけど、どうしても最近『スリジェネ』の仕事の方が多くなってるともね。そりゃ、物書きのイメージもなくなるよね」

茜「来週、『神様が願うまで』の一般オーディションでしょ? 私とコウタも、受付とか手伝うことになってるけど、今どうい

状況なの？」

雅也「オーデイションエントリーの人への連絡は、ヤマさんがやってくれてるんだけど、昨日の段階で五十六人って言ってた」

直海「そんなにオーデイション受ける人いるんだ」

雅也「広報にも載ったし、新聞の地域版にも大きく載ったでしょ。だから、結構いろんな世代の人からのエントリーがあるみたいでね。あと一週間あるから、多分このままだと六十人は超えるだろうね」

浩太「午前と午後に、オーデイション分けて正解だったな。一気に六十人にも来られたら、さばき切れないわ」

雅也「そうだよね。でもさ、来週とみーもコウタも大丈夫？ オーデイション土曜日ってことは、金曜の夜に仕事終わりにそのままこっちに帰ってくることになるけど」

茜「大丈夫」

雅也「神奈川から愛知まで車で何時間もかか

るから、気を付けておいでよ」

茜「うん、ありがとう」

浩太「よし、準備できた。一回通してみるか」

茜「(スマホを雅也に渡して)うっちー、動画お願い」

雅也「オツケー」

それぞれ準備をする浩太、茜、昇平、直海、寿梨。

雅也「じゃあ、動画回すよ」

と、録画ボタンを押して、領きの合図をする――ドラムの昇平のカウントで、それぞれ演奏を始めるギターの前、ベースの浩太、キーボードの寿梨。ベースを弾きながら歌い始める直海。

2 中央公民館・廊下く大会議室

オーディション参加者の列ができており、田所と茉奈が誘導をしている。

N「七月上旬、秋の市民ミュージカル『神様が願うまで』の一般オーディションが開催

され、午前と午後で合計六十三人の方がオーディションに参加されました。下は小学五年生、上は六十代後半、まさに老若男女問わずという状態でした。午前の部では主に午前は小学生から高校生までの主にな生が多い印象で、午後の部は成人の方が多く見受けられました」

審査員席に座っている佐代子、山中、本村、市役所職員・小島——受付で参加者の対応をしている雅也、浩太、茜。

N「その参加者の方たちも、まさに芸達者な人たちがそれなりに揃っております……」

以下、オーディション参加者の自己紹介と、受付にいる雅也、浩太、茜をカットバックで。

× × ×

オーディション参加者・弘田洸（23）。

洸「弘田洸と言います。音大でオペラを専攻しています」

浩太「オペラだって」

茜「ガチじゃん」

雅也「すげえ人が来たな……」

× × ×

オーディション参加者・鈴岡ゆりえ

(19)

ゆりえ「鈴岡ゆりえです。大学一年生です。

高校の時、学校の企画で開催されたミュー

ジカルに出演しました」

浩太「あの子、可愛いな」

雅也「ヒロインとか、メインどころ向いてそ

う」

茜「悔しいけど、可愛いね」

雅也「悔しいは余計なんじゃない」

茜「……」

× × ×

オーディション参加者・山川裕作(20)

裕作「山川裕作、大学二年生です。高校の時、

演劇部に三年間入ってました」

浩太「出た、演劇部出身」

茜「イケメンだね」

雅也「あれも、メインどころっぽいな」

× × ×

オーディション参加者・北まひる（22）。

まひる「北まひるです。大学四年生です。小さい頃から祖母の影響で三味線を習っていて、今も師範の元で古典作品を主に教わっています」

浩太「三味線だって」

茜「大学四年ってことは、私の一個下か……」

雅也「確かに、上品というか、古風な感じがするね」

× × ×

オーディション参加者・月島藍那（22）。

藍那「月島藍那です。今はフリーモデルとして、主にポートレートを中心にやっています」

浩太「モデルだって。確かに、ずば抜けてオーラがすごいもんな」

茜「可愛いというより、キレイ系だね、あれは」

雅也「確かに。雑誌の表紙とかになったら、

絶対買っちゃいそう」

浩太「うっちー、好きそうだもんな、ああい
う子」

雅也「どういうこと？」

×

×

×

オーディション参加者・大森泰明（58）。

大森「大森泰明です。若い頃から、ひたすら
趣味で演劇をしてきた演劇バカです。よろ
しくお願いします」

浩太「渋いな」

茜「ダンディだね」

雅也「お父さん役似合いそう」

茜「確かに」

×

×

×

オーディション参加者・加原美穂子

（35）。

美穂子「加原美穂子です。娘と一緒に、住吉
先生のダンス教室で学んでいます」

浩太「出た、住吉先生のところの……」

茜「娘さんと一緒ってことは……」

雅也「多分、あの隣の子じゃないかな」

× × ×

オーディション参加者・加原千世（13）。

千世「加原千世です。中学一年生です。小学

校の頃から、住吉先生のところでダンスを

学んでいます」

浩太「あれで中一？」

茜「大人っぽいね」

雅也「勝手に高校生ぐらいだと思ってた」

× × ×

オーディション参加者・林亜里沙（12）。

亜里沙「林亜里沙、小学六年生です。私はず

っと、沖島友さんの作品が大好きで、ぜひ

出演してみたいと思い、オーディションに

応募しました」

浩太「子どもって、原作に出てきたっけ？」

茜「いや、そんなに出てこないよね」

雅也「ヤマさんが、原作のどのエピソードを

使うかによるけどね」

× × ×

オーディション参加者・赤澤隆太（11）。

隆太「小学五年生、赤澤隆太です！ 僕は、

人を楽しませるのが大好きなので、ミュー

ジカルに参加しました！」

浩太「元気だねえ」

茜「ああいう子が稽古にいたら、楽しいだろ

うね」

雅也「あの子も、何かしらの役もらえそうな

気がするけど」

× × ×

オーディション参加者・辻松翔（11）。

翔「辻松翔、小学五年生です。お芝居はやつ

たことありませんが、一生懸命頑張りたい

と思います」

浩太「さっきの子と同年か」

茜「何か、真面目そうな男の子だね」

雅也「いや、さっきの子と友達になると、案

外素が出ると思うよ。今は、真面目モード

の仮面被ってる気がする」

浩太「そうなのかな？」

雅也「何となく、俺にはそんな気がする」

× × ×

オーディション参加者・大坂理央（12）。

理央「大坂理央、小学六年生です。お姉ちゃ

んが『スリジェネ』のメンバーで、お姉ち

ゃんみたいに楽しくステージに立ちたいと

思っ、エントリーしました」

浩太「お姉ちゃん……？」

茜「大坂って……」

雅也「ミオだ……。ミオの妹ちゃんだよ」

浩太「マジか……」

× × ×

審査会をしている佐代子、山中、本村、

小島——片付けをしている雅也、田所、

茉奈、浩太、茜。

佐代子「半分近く落とすとなると、難しいで

すね」

小島「子どもたちはどうでしょうか？ 原

作小説には、出てきませんが」

山中「僕としては、子どもたちはちよい役ではなくて、猫の役をやってもらおうかと思っ
ってます」

佐代子「猫？」

山中「少し創作が入りますが、せっかく才能のある子どもたちなので、そういうシーンをワンシーンだけ入れようかなと」

本村「まあ、子どもたちの歌唱シーンとかも入れたら、見てる人にとっては和むシーン
というか、ほんわかしたシーンになる感じがするよね」

佐代子「（小島に）小島さん、原作の改変は問題ないでしょうか？」

小島「舞台脚本は、原作である沖島先生にも最終的にはチェックしていただきます。大幅な改変でなく、あくまでミュージカル仕立てにするための脚色ならば問題ないかと思
います。事前に、私の方から出版社にそのことは伝えておきます」

佐代子「よろしく願いします」

3 南公民館・大会議室

稽古の休憩中。

雅也、浩太、茜、美央、が話している。

美央「え、理央がオーディションに来てた？」

雅也「ミオ、知らなかったの？」

美央「昨日の午前中は、私学校行ってたから。

母さんも理央も何も言っていなかったのにな」

浩太「反対されると思ったんじゃないか」

美央「まあ、私としては妹が同じ稽古場にい

るほどやりにくいものはないからね」

茜「そういうのもあったから、言わなかった

んじゃない？」

美央「それで、理央は受かったの？」

雅也「受かったみたいだよ」

美央「マジ？」

雅也「昨日のオーディション、全部で六十三

人も来てね、選考大変だったんだから」

浩太「結構時間かけて話してたもんね、審査

員たち」

茜「そりゃ、半分近く残して、半分以上落とすんだから、慎重な話し合いにもなるでしょう」

美央「それだけの人数参加して、どうしてわざわざ理央残すかな……」

雅也「オーディション結果は、改めてメールで送るみたいだから、美央から妹ちゃんには言っちゃダメだよ」

美央「言いたくもないわ、そんなこと」
茜「せっかく妹ちゃんと同じ舞台に立てるのに」

美央「私が嫌なの」

浩太「妹ちゃん、お姉ちゃんみたいに楽しくステージに立ちたいって、自己紹介の時に言ってたよ」

美央「理央、そんなこと言ったの？」

雅也「ああ、確かに言ってたわ」

美央「……」

雅也「まあ、せっかく妹ちゃんも来るんだから、姉妹仲良くやんなさいよ」

美央「……」

と、住吉が入ってくる。

住吉「お疲れ様です」

一同「お疲れ様です」

住吉「昨日は、オーディション参加できなくてすみませんでした」

雅也「いえいえ。あ、そういえば住吉先生のダンス教室に通ってる生徒さんも、何人か来てましたよ」

住吉「私が勧めたんですよ。あの作品、私がダンス振付と指導を担当させていただくしよ。ダンスパートで、もし使えそうな人がいればと思って、半強制的にオーディション受けさせたんですよ」

浩太「親子連れの人、来てましたよ。娘さんのほうは、中一なのにすごい大人っぽくて」
住吉「ああ、加原親子ね。あの二人は、うちのダンス教室でも、中心メンバーで腕は確かです」

茜「親子でダンスっていうのも、すごいです

ね」

住吉「最初は娘が通ってて、途中から母親も一緒にレッスン来るようになって。そしてらいつの間にか、親子揃ってダンス漬けの生活になっちゃったのよ」

茜「あのお母さんの方は、元々ダンス経験あったんですか？ ダンス審査の時、結構キレキレに踊ってましたから」

住吉「うちに来てからよ、ダンスするようになったの」

茜「それであんなに上手くなるんですか」

住吉「私、教室ではスパルタで教えてるから」

茜「あれ、そういえば今日の最後に、メンバーだけ先行してキャスティング発表するんじゃないかったっけ？」

雅也「あ、そうだった……」

×

×

×

雅也、佐代子、山中、浩太、昇平、直

海、茜、美央、怜奈、真理恵、緑、愛

花、寿梨、橋岡、住吉が集まっている。

佐代子「昨日、『神様が願うまで』の一般オーディションが行われ、全体キャストがこれで確定しました。この場にいるメンバーの中には出演しない人もいますが、今日はメンバーのキャスティングを発表したいと思います。では、ヤマさんお願いします」

山中「はい。それではメンバーのキャスティングを発表します。主人公である女子高生千紗役は、ナオに決定しました」

拍手をする一同。

怜奈「すごい、ナオ！」

真理恵「おめでとう！」

直海「ありがとうございます」

愛花「……」

山中「続いて、千紗の友人の女子高生役にミ

オ、むぎ、ジュリ」

美央・愛花・寿梨「はい」

山中「千紗のお母さん役に、ミドリさん」

緑「はい」

山中「そしてうちーには、今回アンサンブ

ルとして出てもらうことにしました」

雅也「はい」

佐代子「うっちーは、事務局との兼ね合いもあるんで、キャストとして負担の無い程度の役にしてもらいました」

雅也「大丈夫です」

佐代子「それから、『スリジエネ』のこともよく分かってて、舞台の現場を知っているのはっしーに、舞台監督をお願いしました」

橋岡「舞台監督して、皆さんが円滑に舞台に立てるようにサポートしていきます。よろしくお願いします」

一同「よろしくお願いします」

×

×

×

部屋の片づけをして出ていく一同――
愛花が呆然としている。緑、それに気づいて、

緑「むぎ、大丈夫？」

愛花「ああ……悔しい……。主役取れなかった……」

緑「そういう世界だからね……」

愛花、涙を流して泣き始める——緑、

優しく背中をさする。

N 「『神様が願うまで』のオーディションが
終わり、キャストも確定した中で、主役の
座を勝ち取れなかったというむぎのような
人もいれば、一般オーディションでも落選
した人もいる、その中でアンサンブルでも
みんなと同じステージに立てることを幸せ
だと思わなければいけないのだと、このむ
ぎの話の後日聞かされた僕は思っていたの
でした」

つづく